

たとえば松の盆栽は……

加藤文子

家業が盆栽屋だったので子供の頃から松の盆栽をたくさん見てきた。

ケヤキやモミジ、梅など他にもいろいろ育てていたが、松の棚が断然多かった。

盆栽といえば松でしょう、といわれるくらい昔も今も代表格のような存在だ。

松は神の依る木として門松などにされ、古くから長寿や慶賀を表わすものとして尊ばれている。

また、常緑で変わらないところから、永久・不変であることのとえとして縁起の良いものとされてきた。

樹齢百年を越える盆栽も珍しくないほど、長寿の樹としても知られている。

そんな諸々の理由から長きにわたり親しまれてきたのだろう。

私が目にしてきた松の多くは、幹がずっしり太く、三角形を基調にかたちづくられたもの。

若木の頃から針金を掛け、枝を剪定しながら理想とするかたちに近づけるべく多くの労力が注が



れている。

棚上には一律に成形された松たちが整然と並ぶ。私にはどれがどれだか違いがよくわからない。かたちづくるための根こゑのようなものが前面に感じられるずんぐりした姿が窮屈に思える。

盆栽を生業とする側、愛好する側も、これがすばらしいという共通の価値観がいつの間にか定着したのだと思う。

この枝ぶりが、根張りがネ、もっとうだつたら良いのに……と、勝手な評価がされてきた。人それぞれ個性が違う、松だつて異なつて当然。これも良いけれど、あちらも良い、感想もいろいろで良い。

種をまく。発芽してヒヨロヒヨロ伸び出す。どこへ向かうのか、たよりないはじまり。健康で元気に育つよう最低のことはするとしても、なるべく手を出さない。

それから五年、十年、三十年が経過するとしたら……。松も私も互いに三十年後の姿、かたちになつている。

幹は意外と細い、枝は思い思いの方向に拡がっている。不揃いでお行儀が良いとはいえない。けれどどこか愛敬がある。三十年の時から紡ぎ出された今日の姿だ。

いいネエ、だつて三十年の仲だもの、お互い好きに決まっていますではないですか。

こんなカタチも有りにしたいです。



五葉松 30年一緒にいます。